

第1部

関門地域の国際（インバウンド）観光振興

—韓国編—

まえがき

関門地域にとって、観光振興が重要な施策課題であることは両市においても十分認識されている。また、この分野では両市の連携で観光スポットの整備が進行し、例えば関門海峡をはさむ門司港レトロや唐戸近辺が賑わいをみせていると、われわれも認識している。

しかし、この観光振興は国内客に偏し、国際観光は他地域に遅れをとっているのではないかと、地理的に大陸に近く、歴史的にも大陸との交流地があったにも関わらずその優位性が活かされていないのではないかと。21世紀の大交流時代にふさわしいアジアとの政治的・経済的・文化的交流が、当地でも大衆の観光往来を媒介に発展して欲しい、という不満や希望が、このプロジェクトの出発点である。

本年度は、韓国対象のインバウンド観光にテーマを絞った。周知のように、日本はインバウンド後進国で資料も整っていない。われわれ「観光班」は、日本と韓国で取材を重ね、その都度班の勉強会を開いて知識の共有と各自の分担を明確化していった。その過程で、経済学の簡単な論理を借りれば観光事業にも観光需要と観光供給があり、その間を観光流通が媒介するということが分かった。より具体的に観光需要とは、韓国人の訪日観光ニーズからその観光消費である。また、観光供給とは、日本側での韓国人向け観光資源発掘から資源生産である。さらに観光流通では、これらの需要と資源をマッチングさせる役割にある観光業者が焦点になる。このような論理をもとに、各人の分担が決められた。

第1章の高嶋稿と第2章の宗近稿は、アンケート形式による需要（ニーズ）調査である。前者は、韓国若者の観光ニーズを釜山・仁川の大学生に代表させて調査している。後者は、2002年から釜山・蔚山～小倉間で就航した高速船乗客を対象に調査している。先例のない分野での的を絞った具体的な調査といえる。

第3章の尹稿と第4章の松永稿は、韓国人の観光需要に触れながらも日本側インバウンド観光資源供給に比重を寄せた考察である。関門の観光スポットやホテル、あるいはデビュー間近の新北九州空港を視野に入れ、先進的な他観光地事例も紹介しながらいくつかの振興上の提言を行っている。

第5章の山本稿は、上述の観光流通を日本向け韓国アウトバウンド業者調査として論じている。彼らが実際に訪日観光商品を扱っているからである。パッケージツアー商品に焦点を当てたのは、それが旅行業界の特徴を示す基幹商品だからである。

ところで、おおむね各稿が最後の部分で関門地域インバウンド観光振興に関わる提言を行っている。その提言は、ほとんど常識的であったり、時には性急的であったりするかも知れない。われわれがインバウンド観光後進地域に住みながら、暗中模索の末たどり着いたさしあたりの提言であることをご理解のうえ、ご検討・ご批判いただきたい。

最後に、アンケート票のハングル訳、および記入済のアンケート票あるいはハングル文献の邦訳は、メンバーの中尾勝典氏の手による。特筆して感謝申し上げたい。